

平成 23 年度日本医学図書館協会・協会賞奨励賞選考結果

1. 協会賞・奨励賞選考委員会

委員長 青木 仕（順天）

委員 大谷 裕（「医学図書館」編集委員長）、押田 いく子（東邦）、遠藤 典子（東医）、
佐藤 淑子（東女）

2. 選考経過

平成 23 年度上記協会賞・奨励賞について公募締切日までに応募が無かったため、選考委員会委員より候補があがり、選考委員会において慎重に審査した結果、受賞者を下記の通り決定いたしましたので御報告いたします。

3. 第 83 回(2012 年) 協会賞・奨励賞 選考結果

【協会賞】

該当者なし

【奨励賞】

西 さやか（東京医科大学図書館）

東京医科大学図書館相互貸借統計分析よりみた相互貸借状況の歴史的変化

医学図書館 2011;58(2):119-23.

[推薦理由]

本論は、著者が所属する東京医科大学図書館の 50 年間に亘る相互貸借業務のデータを分析したものである。内容は、50 年間の文献複写の受付と申込件数の推移、また、電子ジャーナルの登場により利用される資料の変化が著しく認められた 2000 年度と 2009 年度の資料別、利用者別の比較を行っている。その結果、まず受付件数については 3 つのターニングポイントが認められた。1 つ目は 1966 年の新宿区内近隣 3 館、慶應義塾大学、東京女子医科大学、東京医科大学に導入されたテレックスによる文献複写の増加である。2 つ目は 1993 年の MR の自粛と NACSIS-ILL の参加による増加であり、この増加傾向は 2003 年でピークを迎える。3 つ目は 2003 年以降の電子ジャーナルの普及による減少傾向である。これ以降、受付件数は毎年 1%~10%程度減少していく。機関別受付数をみると近年、病院からの申し込みが増加している。その要因として、病院などの小規模図書室では、検索データベースの普及により文献情報の入手が簡便になったが、資料の多くは所蔵しておらず相互貸借の利用が増加したものと推察される。2000 年度と 2009 年度について資料別にみると受付、申込ともに洋雑誌から和雑誌への需要の増加が認められた。その要因としては、国内機関における洋雑誌の電子ジャーナルの充足が窺えた。また、近年の 10 年間に於いて看護学系雑誌の需要の増加も認められた。なお、特に近年、電子ジャーナル契約数の多い大学では、相互貸借の利用が減少している。

本論は、長期的スパンで相互貸借のデータ分析を行い、テレックスや電子ジャーナルの導入が相互貸借業務に過去に例のない大きな影響を与えていることを導き出している。和雑誌や看護系雑誌の需要の増加もデータから導き出している。

現在のこの時点で、過去 50 年間の相互貸借業務を分析し、今後の課題を整理することは意義のあることであり、着眼点がよい論文である。

分析の結果、課題として電子ジャーナルの NACSIS への登録の推進や電子ジャーナル提供機関と図書館側との電子ジャーナルのより一層の提供を目指し協議が必要であること。次に、看護師の文献需要の増加に応じていくために、看護系資料の所蔵の充実と電子ジャーナル化の推進、

そして、コ・メディカルの潜在的需要にも応える必要性が提示されている。これらは、相互貸借業務の改善にとどまらず、今後の図書館サービスの方向を示唆していると思われる。また、それらの課題の多くは日本医学図書館協会加盟館の課題でもあり、示唆に富む論文である。よって本論は日本医学図書館協会・奨励賞に値するものである。